母のひろば675号　2020年８月15日発行

母のひろば 675

doshinsha / haha no hiroba

田畑精一さんを偲んで／いわむらかずお、酒井京子　2
『みどりのほし』刊行に寄せて／林木林、長谷川義史　3
戦後75年特集　８月15日と私たち　4
まるまるめいた日記⑤／種村有希子　7
イラスト／谷口広樹

あの日のことから……

あまんきみこ

75年前、私は旧満州の大連にいました。あの８月15日、S女学校の２年生は空襲に備えて神社の境内に大きな貯水池を掘っていたのです。正午の玉音放送は社務所の前に全員整列し頭（こうべ）をたれて聞きましたが、波のような雑音が混じり内容は殆（ほとん）どわかりませんでした。

けれど少しして慌ただしく「作業中止」になり、私達はシャベルや簀（もっこ）などを抱えて学校に引き返し、各々のクラスにわかれ「敗戦」を知らされました。更に危険だから急いで帰るよう指示され、一斉下校で帰宅したのです。

翌日、家の門や玄関や裏口の扉に鍵をかけ、釘をうち、階下の窓には厚い板がはられました。昼間も暗くなった部屋で、男の子に見えるよう長い髪を短く切られたとき、私は自分達が借りものの植民地に暮らしていることを知りました。やがてソ連軍が進駐し、鉄砲やピストルの音を近くで聞いたり、２階のベランダから屋根に移り、瓦を這って煙突の陰に隠れたりもしましたが、治安が少しずつよくなり、10月なかばには、学校が再開されました。

課目は「修身」が「社会」になり「日本史」「世界史」が消え、語学は３カ国語「英語」「露語」「中国語」の時間がうまれました。そして教室や廊下、階段のおどり場の壁には、〈百八十度の転回〉と大書された紙が貼られたのです。「聖戦」「必勝」「神国」「五族協和」など説かれた先生の口から反対の言葉がでるようになりました。既に異国となった地で教育の方向を半回転しなければ、先生がたは危なかったのではないでしょうか。

1946年12月末、凍（い）てつくような講堂で上級生のくりあげ卒業式、私達の終業式、お別れ会が重ねて行われました。その日が大連の全ての学校の最後の日となったのです。

そして次の年の春、日本国憲法施行の年に祖国の土を踏むことができました。

このように終戦の日のことからをふりかえるだけで、傀儡（かいらい）の国満州のまちがった成立のしかたと、そこにいた日本人の立場が自ずと見えてきます。昭和という時代は、内外の夥（おびただ）しい無念の死と涙によって支えられてきました。「聖戦」はない。「正しい戦争」などない――私達はそれぞれが生きてきた場所で、過去に真摯に向きあえばこそ現在が見えてき、未来も見えてくるのではないでしょうか。今、ここに生かされている１人として、あの日からの「戦後」をいつまでもつづけなければ……私にはそう思われてならないのです。

（児童文学作家）

田畑精一さんを偲んで

「絵は作だよな」
いわむらかずお

田畑精一さんが逝ってしまった。寂しい。

いつもにこやかで若々しく、一緒にいると、彼が年上だということをつい忘れてしまう。発言のあと、目を細めて弾けるように笑うあの声が今も聞こえる。

田畑さんとはじめて出会ったのは、もう50年以上前、お互いにまだこれから絵本の仕事を始めようかという時期だった。その後、私が子どもの本の画家の著作権擁護団体「童美連」に入会すると田畑さんと再会、すぐに親しくなった。田畑さんが著作権部長をやると私が引き継ぎ、彼が理事長になるとその後を私が、というふうに一緒に活動を続けた。田畑さんに共感したのは、私たちが戦後獲得した「基本的人権」や「個人の尊重」と重なる著作権の捉え方だった。

『おしいれのぼうけん』の絵は圧巻だった。１冊の絵本の中に大きなドラマがつぎつぎに展開され、そして、モデルが実在しているかのように、登場する子ども一人ひとりの個性が生き生きと描き分けられている。ここにも子どもたちへの「個人の尊重」が見えた。

表紙を見ると〈さく　ふるたたるひ　たばたせいいち〉とある。私たちがよく話し合った、「絵は作だよな」という主張を、絵がまだ一段低く見られていた時代に、充実した仕事をすることで貫いてみせたのである。

『ピカピカ』の第１場面の試作を15枚も描いたというので見せてもらった。自分が出来る最高の表現をいつも追い続けた田畑さんの姿勢が見えた。『おしいれのぼうけん』はもちろん、『ダンプえんちょうやっつけた』にも『ひ・み・つ』にも『さくら』にも、そのことがいつまでも新鮮な緊張感を持って伝わってくる。田畑精一は今もすぐそこにいる。

（いわむら かずお／絵本作家）

紙芝居『おとうさん』
1968年 与田準一／脚本

『おしいれのぼうけん』
1974年 古田足日との共作

『ダンプえんちょうやっつけた』
1978年 古田足日との共作

『ゆうちゃんのゆうは？』
1981年 神沢利子との共作

紙芝居「ロボット・カミイ」シリーズ
1970年 古田足日／脚本

『ひ・み・つ』2004年

『さくら』2013年

こだわりの人
酒井京子

「田畑先生の生涯は、とても素晴らしかったと思います。皆さん、拍手で田畑先生を送りましょう！」

これは、田畑さんが最後の１年を過ごした介護施設の看護師さんの言葉でした。田畑さんは、拍手の中、天国に行ってしまわれました。こんな、見送り方があろうとは！

コロナの影響で面会が制限されて静かな中、田畑さんの胸には、施設の庭で咲いたみごとな大輪の紫陽花がふたつの花束になって置かれました。

田畑さんの生涯は、芦屋のぼんぼんとして育った幸せだった幼少期／正しい戦争と信じた軍国少年時代／戦後の貧乏な中でも行動的だった高校時代／生きていく上での新しい価値観を探し求めた京都大学から人形劇団への転身／そして、35歳からのイラストレーターとしてのスタート、というように分けられると思います。田畑さんは、戦争の深い傷を抱えながら自己を探して、人生を激しく生きたのだと思います。

田畑さんのこだわりは、作品創りは勿論のこと、全てにおいて並大抵ではありませんでした。食べ物、着る物などなど……。

絵本の原稿を前に、どの画材でどんな絵がこの作品を生かすのか、徹底的に考え探すのです。ですから当然時間がかかり遅筆画家と編集者の間では言われていました。

『おしいれのぼうけん』の時も、体験入園した保育園の子どもたちが使っていた鉛筆とわら半紙に画材を決めるまでに、１年はかかったと思います。

「子どもたちの心を揺さぶる本を創りたい」

時々こうおっしゃっていましたが、田畑さの本は、これからも子どもたちの心に深く届くと信じています。（さかい きょうこ／童心社会長）

長谷川義史（はせがわよしふみ）

林木林（はやしきりん）

みどりのほし
林木林／作
長谷川義史／絵
本体価格 1500円＋税

全文はこちらからご覧いただけます。
https://www.doshinsha.co.jp/news/detail.php?id=2023

『みどりのほし』刊行に寄せて

先月刊行された『みどりのほし』は、男の子が夏みかんのてっぺんに緑の星を見つけ、そこから心を広げていく絵本です。著者のお二人にお話を伺いました。

林さん　いつだったか、家に置いてあったみかんのてっぺんに緑の星を見つけました。私には、なんだかそれが緑の地球（ほし）で生まれたしるしに見えたんです。その素敵な発見を、ぜひ作品の形で残したくて、最初に詩を書きました。（編集部注：この詩が二〇一一年、「こどもの詩 周南賞」作詩部門優秀賞を受賞）

長谷川さん　「みどりのほし」を初めて見たとき（編集部注：長谷川さんは「こどもの詩 周南賞」の選考委員でした）、絵本のことは考えていなくて、純粋に詩として読みました。青緑や黄緑、深い緑……さわやかで、みずみずしい、いろいろな緑色が次々に頭にうかび、野菜や果物のかわいい星の形をしたヘタも、ビジュアルとしてはっきり見えてきたんです。当時たくさん読んだ詩の中でも、よく覚えています。

　詩を読んでいて、「ほんまや。そういえば野菜のヘタって星の形してる！」と、その発見に感心しました。

林さん　レモンも、トマトも、あら、よく見ると、ピーマン、パプリカ、しし唐も、緑の星をつけてるんだな、オクラはスライスすると星の形だし……といった具合に、いろんな野菜、果物、花、葉っぱに、緑の星を見つけていって。そのたびに嬉しくなって。みんな同じ、地球で生まれた命だよ。植物たちからそう教えてもらっているみたいでした。

　たったひとつの緑の星との出合いが、たくさんの星の発見につながり、イマジネーションを育んで、豊かな気持ちにしてくれました。

長谷川さん　この絵本では、具体的に男の子が出合うものとイメージの世界が混じり合って出てきます。具象によりすぎると説明的になって想像の広がりをなくしてしまうし、抽象になりすぎると一冊の絵本の流れがわからなくなってしまう。絵本の展開とイメージの世界、両方を捉えられる着地点を見つけるのが難しかった。

　この絵本に出てくる「ぼく」は、ある特定の「ぼく」ではなく、みんなの中にある「ぼく」。だから今回僕は、「ぼく」を白くぬいた描き方にしたんだと思います。そういうことを頭で考えて決めたわけではなく、「これだ！」という感覚をつかまえられるまで、とにかく何枚も何枚も描きました。

林さん　絵本としてつくりあげていくにあたっては、場面の変化や流れ、絵といっしょに見たときにどう響くかなど、絵本ならではの特性を意識しながら言葉を考えました。絵ができてからも調整を重ね、歌のときとは違う言葉、絵本の言葉として書いています。

　作品の世界観を深く表現して下さっている長谷川さんの絵は、言葉の向こう側を感じることができ、どこまでも想像が広がっていくようです。

　読者の皆さんには、ぜひ、ゆったりと心を大の字にして、絵本を開いていただけたら、と思います。

8月15日と私たち

戦後75年特集

アジア・太平洋戦争の終結から七十五年を迎えます。各分野の方々に〈終戦の日〉にまつわる短いエッセイをお願いしました。あの日の記憶や終戦の日についてのお考えなど、いただいた原稿を五十音順に掲載いたします。

アーサー・ビナード
詩人

人間のすることなすことすべて、いつかは終わる。戦争も例外ではないと考えれば、「終戦」という表現も成り立つ。ただ、権力組織が一方的に決めてカレンダーに載せた「記念日」の類いは、往々にして眉唾物だ。八月十五日をシンボリックに捉えたり追悼だけで済ませたりしたら、思考回路が腐る気がする。ぼくは「終戦の詔書」を読み直して掘り下げる日として、毎年使ってきた。巧妙に組み立てられたあの公文書の矛盾は、幾重にもかさなり、英文が同時に作られた可能性もあり、闇が深い。また、中国大陸で暮らしていた臣民たちが冷酷に切り捨てられた事実も、思い起こす日でもある。

いわむらかずお
絵本作家

一九四五年八月十五日から七十五年が過ぎた。体験がないという意味では、もう、ほとんどの大人は戦争を知らない。今年八十一歳になった私も記憶に残っているのは、十四日深夜B29の大編隊が頭上を通過していったとか、母と離れればなれになった疎開の寂しさとか、野の草をかじった空腹の苦しみなどだ。しかし、いま私たちは、「戦争を知らない」というわけにいかない。七十五年間戦争から私たちを守ってくれた憲法九条を変えようとする動きもある。先人たちが残した優れた著作物や映像から、戦争とは何かを知り、考えを深めることが大切だ。

神沢利子　かんざわ　としこ
児童文学作家

終戦＝敗戦を境に自分が変わったとは思えない。その日のあと、日数をかけて、自分を縛って来たもの、それは天皇制に根ざしたものだが……。

戦を聖戦と称し信じこまされて来た教育、身にしみついた考え方から自らを解放するのに長い長い時間がかかり、まだかかっている。

勝っていたら恐ろしいことだったと思うから、あの敗戦の日は祝日であっていいのだ。戦後教育を亡国的という文相*が現れたこの八月に、思いは深いものがある。**

*当時の藤尾正行文部大臣のこと。歴史認識をめぐる発言により、一九八六年九月に大臣を罷免された。

**「母のひろば」二六七号（一九八六年八月）より再掲

早乙女勝元　さおとめ　かつもと
作家

あの日あの時、十三歳の私は向島区（現墨田区）寺島町の半焼けの家にいた。天

皇の放送は聞いていない。おそらく一億玉砕の時がきたのだと思った。いざとなれば神風が吹くと教えられていたからだが、子ども心にそれを信じる気にはなれなかった。すると残された道はあきらかで、死ぬ時はせめて満腹でありたい、が正直な心境だった。しかし、死はまぬがれて敗戦となり、この時を知らずに消えた十万人もの声なき声を忘れずに生きようと、心に誓ったのだった。

田畑精一　たばた　せいいち
画家

ぼくは、ほんとうに〝天皇陛下の御為に〟死ぬつもりだった。

よくもまあ、あんなに見事にだまされたものである。

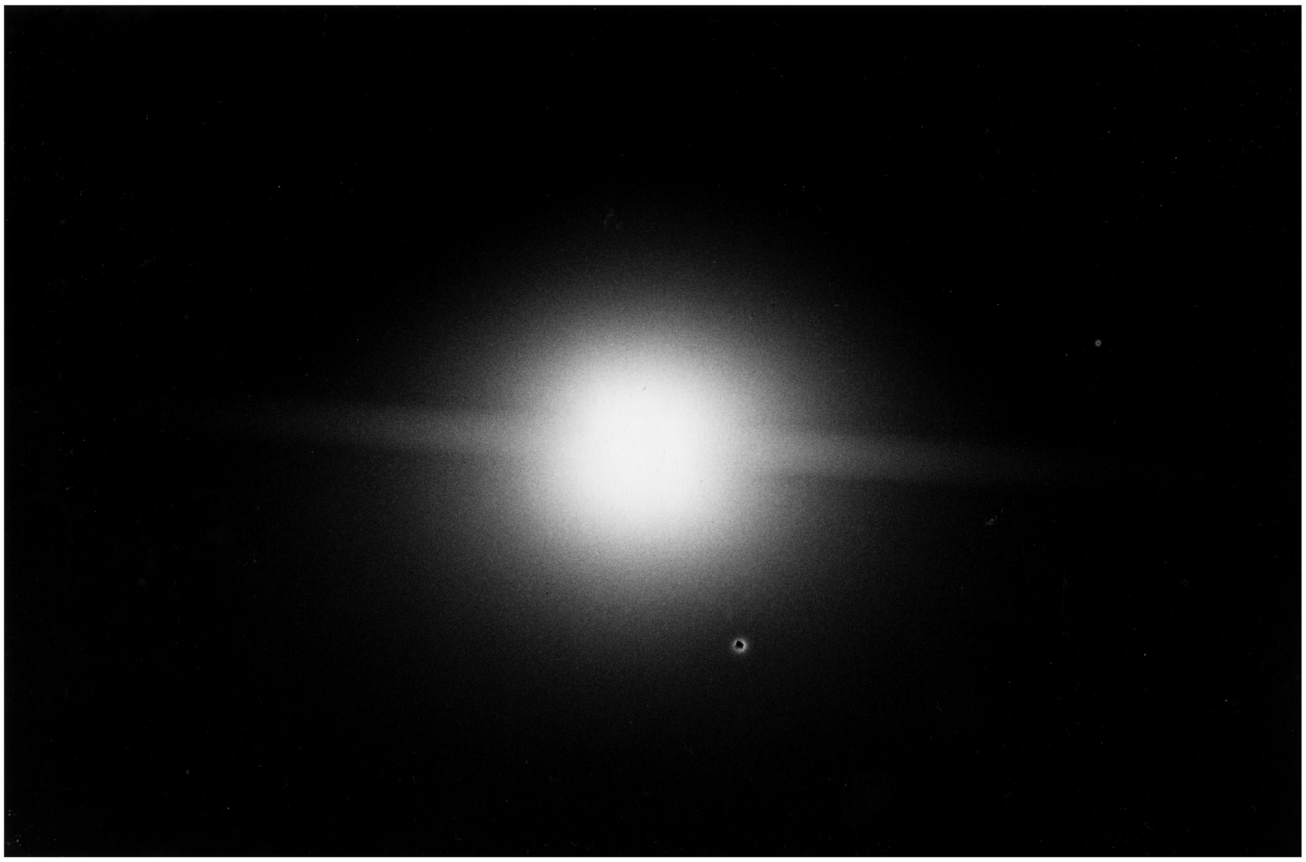
だから今、子どもたちに、見かけだけのかっこ良さや面白さでない、ほんとうのものを見つける心と力を育てたい。暗闇の中から真実を見つけ出すことが、心をふるわすような大きい喜びであることを子どもたちに知らせたい。*

*「母のひろば」二六七号（一九八六年八月）より再掲

中川李枝子　なかがわ　りえこ
児童文学作家

十歳だった。東京の子どもたちに学童疎開令が出て、姉と私は札幌の祖父母の家で敗戦のラジオを聴いた。猛暑の午前中、放送開始まで子どもは庭の防空壕で待つようにと暗い穴に押し込められた。やっと時間になって茶の間に正座、放送内容は私には不明のまま終わった。祖母が前かけの端で目尻を押さえて一言「もう空襲はありませんよ」と教えてくれた。そのとたん、暑さも息苦しさもどこへやら私のまわりの空気が明るく心地よく変わったではないか！　もう戦争は終わったのだ！

私は東京大空襲も原子爆弾も知らなかったけれど、戦争の記録は絶対に見逃さず、聞き逃さないつもりで、七十五年目を迎える。



濱谷浩《終戦の日の太陽》高田、新潟、1945年　©2020 Keisuke Katano / Courtesy Estate of Hiroshi Hamaya, Oiso, Japan

中村桂子　なかむら　けいこ
理学博士・JT生命誌研究館名誉館長

小学校四年生でした。両親は暮らしを大切にし、子どもたちに戦争の話をほとんどしなかったように思います。そんな中で、敗戦の日の夕食のことは鮮明に覚えています。外へ光がもれないようにと食卓の上の電灯にかかっていた真っ黒い布がはずされたのです。箸を動かす皆の顔がよく見え、思わず笑みがこぼれました。お芋のまわりに米粒がついているというのがあたっている芋御飯は昨日と同

じですが、味が違います。いいなあ。以来、戦争は日常を奪う大嫌いなもの、武力と権力は嫌いです。生まれたからには誰もが毎日を気持ちよく生きるのでなければ意味がありません。

西山利佳　にしやま　りか
児童文学評論家

私は、敗戦から十六年目の一九六一年に生まれました。今から十六年前と言えば二〇〇四年、編集に関わった『わたしたちのアジア・太平洋戦争』（童心社）が出た年です。同じ十六年なのに、生まれる前というのは、なんと遠いことか……。体験集の編集のために戦争体験をたくさん読み、聞き取りもしたのに、なんたること！　私は、八月十五日その日を、満州にいた父がどのように迎えていたのか聞いたことがなかったことに気がつき愕然としています。父は、一昨年の夏亡くなりました。高齢の伯母たちに、話を聞いておかねばとこの原稿を機に思っています。

長谷川義史　はせがわ　よしふみ
絵本作家

昔『戦争を知らない子供たち』という歌がありましたね。

その知らない子どもたちもあれよあれよと歳を重ねて今や「戦争を知らないおじいさんとおばあさん」です。

ほらこの文章の書き出しにしても無意識に「昔」なんて言葉を使ってます。戦争なんて昔のことと思っているのです。自分でも怖いことです。

今年で「終戦の日」から七十五年。ついこの前この国は戦争という名の殺し合いをしていたのです。そのことをしっかり今の子どもたちに伝え一緒に考えるのが「戦争を知らないおじいさんおばあさん」僕らの世代の責任と思います。

武鹿悦子　ぶしか　えつこ
童謡詩人

終戦のあの歴史的な玉音放送を聞いたのは、東京最後の空襲で家を失い、父の郷里へ移住して三月足らずのことでした。

地区の班長宅に集まった人びとと、炎天下、ラジオを庭へ持ち出して聞いたのです。

陛下の声は、嵐のようなノイズに妨げられながら、戦争の終結を告げて悲痛でした。

負け戦であっても、戦争の終結は一応はうれしいことでした。けれど、私たちの未来像がふと見失われようとしている不安に囚われ、私は、塑像のように立ち尽くす人びとのなかに、細い脚で必死に立っていました。

十六歳でした。

二俣英五郎　ふたまた　えいごろう
画家

あの日、前日から、大切な放送があるとのことで、待っていたが、雑音がひどくて、よく聞こえなかったが、見当はついていた。戦争が始まったのが小学四年、終わったのは名目上、中学二年だった。なぜ名目上なのかと言うと、その間、空襲警報の合間をぬって配給の順番待ちをしたり、その横流しを闇取引で手に入れたりしていて、学業はほとんど受けていなかった。着の身着のまま乞食同然の姿で焼けだされた人が大勢いた。その時代、身内が役人か権力者でない限り、次の時代を待つしかなかったのである。

堀尾輝久　ほりお　てるひさ
教育学者・東京大学名誉教授

一九四五年八月十五日、私は旧制中学一年生。父は日中戦争で戦死し（一九三九年）、誉れの家の子として育った軍国少年にとって、決定的な価値転換の始まりの時であった。しかしそれは容易なことではない。空襲の恐怖からの解放の安堵と日本と自分たちの将来の不安。学校では教科書の墨塗りから「あたらしい憲法のはなし」へ。それは日本の近代と現代の区切り、帝国憲法から新憲法へ、世界史的にはファッシズムから民主主義へ、人権と平和を軸とする新たな地球時代への入り口でもあった。日本の歴史と世界史のなかに自分史があることが実感できる戦中、戦後派である。そして原点としての八月十五日に還る自分がある。それは未来を創ることに賭ける自分でもある。

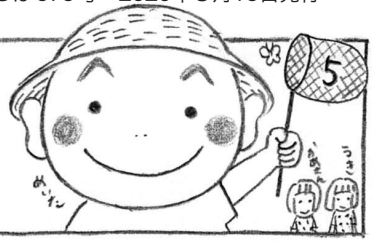
森絵都　もり　えと
児童文学作家

戦争のない時間が日本で七十五年間続いたのはありがたいことですが、なぜか「めでたい」感がありません。日本国内の不穏さもさることながら、世界には今も争いが溢れていて、日常的に人と人が殺し合っています。この現実を意識に刻むこと、人種の垣根なく全ての命を尊ぶことこそが、ひいては日本の平和の永続に繋がるのではないでしょうか。

ちなみに、「終戦」とは戦争を終わらせた側が用いる言葉のように私には思えます。日本人の中にはいまだに日本が戦争に負けたと認めたくない人や、武力で負けても経済で勝ったからチャラだと思っている人たちもいますので、目を覚ましてもらうためにも潔く「敗戦」と言いたいところです。

まるまるめいた日記

種村 有希子



昨年の集中豪雨の日。おいっ子のめいたの家では―

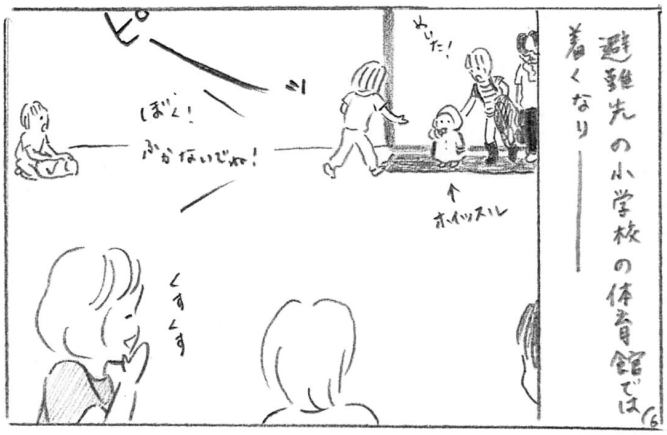
どうしよう 近くの川 氾濫するかもよ

迷っている親をよそに―

ひとりテキパキと大事なものを

おきにいりのきいろいリュックに次々つめて

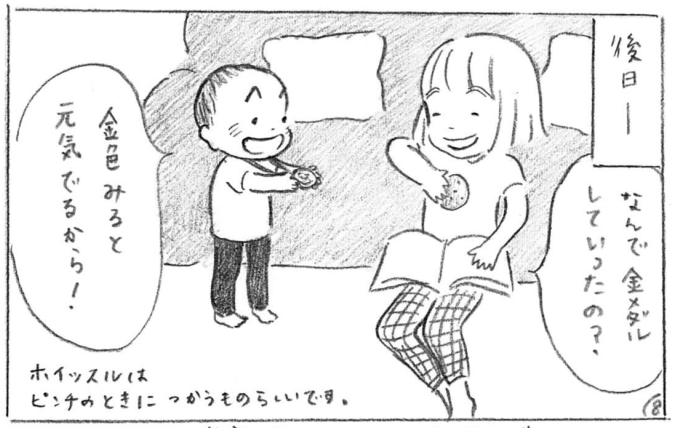
避難先の小学校の体育館では着くなり――



めいたは避難所で安心した様子。幸い大事に至らず避難の一夜が過ぎたそうです。

なぜか胸にホイッスルと金メダルという出で立ちで親を一喝。

後日―



ホイッスルはピンチのときにつかうものらしいです。

つづく

これ以上大きな災害が起きないことを願うばかりです。

読者の声

単行本図書
生きる　劉連仁の物語
森越智子／著
谷口広樹／絵
本体価格１６００円＋税

中国から日本に連れ去られた経緯が詳しく書かれていて、戦争によって何が引き起こされたか、よくわかりました。一気に読みました。この本を他の方たちとも共有して、これからの日本の進むべき道について話し合いたいと思っています。

（北海道　Ｙ・Ｋ　六六歳）

童心社の絵本
はらっぱ
戦争・大空襲・戦後…いま
西村繁男／画
神戸光男／構成・文
本体価格１５００円＋税

はらっぱを通して日本の歴史が語られていると感じました。五歳の息子も、じっとはらっぱを見つめていました。息子が戦争という言葉をはじめて知ったのもこの本を通してです。

（三〇歳）

日・中・韓　平和絵本
非武装地帯に春がくると
イ・オクベ／作
おおたけきよみ／訳
本体価格２０００円＋税

三カ国の作家たちが共同で絵本を出すのは、素晴らしいことですね。もっともっとお互いの国の歴史を知り合い、学び合わなければなりません。まず知ろうとする気持ちを子ども達の心に育てなければ……。絵本の場合、絵が伝えてくれるものが大きいですね。展望台から非武装地帯を眺め続けるおじいさんの人生を想い、語れるものを少しでも持ちたいと感じました。

（広島県　Ｋ・Ｋ　五七歳）

日・中・韓　平和絵本
くつがいく
和歌山静子／作
本体価格１３００円＋税

泣きました。戦争の悲しさを、命の儚さを痛感しました。平和の尊さを小さいうちから伝えていかなくてはなりません。お互いをよく知り、戦争は悲しいことだと知ることが大切だと思います。

（東京都　Ｋ・Ｅ　七九歳）

日・中・韓　平和絵本
京劇がきえた日
姚紅／作
中由美子／訳
本体価格１８００円＋税

姚紅さんの絵は素晴らしい！　という一言に尽きます。一九三七年の南京に暮らす人々と京劇という伝統文化がディテールにわたって豊かに描きこまれていて、思わず見入ってしまいます。そして、読者は、最後の簡潔なテキストで戦争や日本の加害の歴史を知ることになります。中さんの名訳で本当にいい絵本が出版されて嬉しい限りです。

（広島県　Ｙ・Ｕ　五八歳）

単行本絵本
さがしています
アーサー・ビナード／作
岡倉禎志／写真
本体価格１３００円＋税

それぞれの物の持ち主の気持ちになって声に出して、読んでみました。読み終わると、会ったこともないのに、一人ひとりの姿が思い浮かび、遺されたものたちに命があるような気がしました。語りかける一文一文から、強い悲しみや理不尽に対する憤りを感じました。岡倉禎志さんの写真と、アーサー・ビナードさんの言葉には感嘆しました。

（埼玉県　Ｒ・Ｏ　六〇歳）

2020年８月15日発行（毎月刊）
母のひろば　第675号
定価50円（年600円／送料とも）
発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
https://www.doshinsha.co.jp/
デザイン：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただきますと、手続き完了となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。

あとがき

●「戦争は親の敵であり、何としてもその敵を討ちたい。そのためには子どもたちに、生きることは素晴らしい、明日には希望がある、と伝えることだと考えた」田畑精一先生のご講演で、僕の記憶に残った言葉です。逝去されたことが残念でなりませんが、素晴らしい作品、素晴らしい見識で長年童心社を支えてくださり、本当にありがとうございました。 ◉

●祖父の著書の中に終戦の日の記述を見つけた時、遠い日のように感じていた戦争が、ぐっと近づいてきたのを覚えています。「知らない世代」にとって、当時と今が地続きであることを、何をもってリアリティを担保できるかが重要に思います。今号では、いつも見上げればそこにあり、煌々と私たちを照らしている太陽の、あの日の写真をお借りしました。 Ⓝ